
涼宮ハルヒの子育て

一之瀬　迅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの子育て

【Zコード】

Z0915D

【作者名】

一之瀬 迅

【あらすじ】

朝から続く違和感。そして現れる未来の子供たち。しかし、違和感はとれない。何が起こるんだ? なあ、ハルヒよ。この違和感はお前関連でなにか起こることなのかな?

第一章～違和感～

なんだらうな。嫌な感じがする。予兆は今朝からだ。俺は知らなかつたのだが、前々から決まつていたらしく、父親が単身赴任するそだ。場所は遠く、月一で帰つて来れるか来れないかの場所らしい。それと同時に母親が帰郷するらしい。一月も。妹は連れていくそだ。俺は高校なので残ることとなつた。今は高校二年の11月の後半の後半、28日だ。さて、思わぬ懸案事項が出来てしまつた。今日から一月余りの一人暮らし。飯とかどうしようか。

いつまでもクドクドと考えていても仕方がないので、いつも通りの登校をした。強制ハイキングコースがいつもより辛く感じた。教室に入ると、普段見慣れないハルヒが目に入つた。何か仕出かしそうな笑顔。そして何よりポーテールだつた。なんで？

「よお。なんか良いことでもあつたか？」

「おはよ！別に何もないわ。強いて言えば夢見が良かつたことかしら。」

「そうか。そうか。」

「何？文句あんの？」

「いんや。ただ、髪型似合つてゐな。と思つてな。」

「へ？ううう。」

意味不明な唸り声を上げたハルヒはギギギと言つ音が聞こえてきそうな程、ギクシャクした動きで俯いてしまつた。

何だ？長門の真似か？

「違うわよ。バカ。鈍感。」

わお。酷い言われようだな。バカは認めるが、鈍感といつのはよく分からぬのだが。そう言えども最近色んな奴らから鈍感と言われている気がする。いや、言われている。何故だ？

俺が一生懸命に何故、鈍感と言われるのか考えていると岡部がやって来てSHRが始まつた。

授業はハルヒのシャーペン攻撃意外に特に懸案事項もなく滞りなく終わった。

今は放課後。部室に集まつて、何をするのかよくわからないSOS団の活動を行つてゐる。

ハルヒはネットサーフィン。長門はいつも通りに読書に勤しみ。朝比奈さんは、お茶を淹れた後は何かを編んでらつしやる。古泉は俺と囲碁の最中だ。

パタンといつも通りの長門の合図により帰り支度を始める。帰り支度といつても囲碁の碁盤と碁石を片付けて朝比奈さんが着替えるため部室から出て女性陣をまつ詰だ。

「なあ。古泉。」

今朝からの、嫌な感じが無くならない。古泉は多少イライラするときはあるが今ではこういつときに頼れるいい仲間だ。いや、ここは男同士、親友でいいだろつ。

「はい？ なんでしょう？」

「実はな。今朝から嫌な感じがするんだが、ハルヒの精神はどんなだ？」

「実際に落ち着いていますよ。何もなければ先の一週間、閉鎖空間も現れないでしよう。」

「そう、なのかな。」

正直なところ、驚いた。何もないだと？こんなにモヤモヤした、なんとも言えない感覚が一日中続いているのに。

「すみません。お役にたてなくて。」

余程、俺が残念そうな顔をしていたのだろう。古泉はいつものスマイル顔ではなく、真剣な面持ちで謝つてきた。

「いいつて、わからんものは仕方ない。」

後で長門にでも相談してみるか。

ピンポンパンボーン

生徒の呼び出しをします。呼ばれた生徒は大至急、職員室にきてく

ださい。一年五組、涼宮ハルヒさん、
ください。
くん。職員室にきて

ピンポンパンポン

はい？何故。俺とハルヒが呼び出しあへりひへ。

「キヨン！職員室に行くわよ！」

何故にそこまで張り切る。

「どんな理由で呼びだしたのかは分かんないけど。こんな時間に呼び出すなんて、まともな理由である筈が無いわー。皆無よ。済訟。」

ハルヒ。何故言い切る。

何かあるだろ。例えば。・・・んー。・・・無いな。確かに。思
い付かない。

そんなこんなでハルヒに引きずりれてきた俺は無事に職員室に到着。
ハルヒと共に職員室に入った。

第一章～呼び出しの理由（古泉・長門サイド）～

「どうしたんでしょうか？」

珍しく、彼から相談してきたと思つたら、涼宮さんと共に呼び出しだすか。長門さん、呼び出しの理由、分かります？

「7年後の彼らの子供達が来ている。TPDDで来たのではない、変則的急性時空震によつてこの時代に現れたものと思われる。」

彼らの子供ですか、まさか未来の涼宮さんの力でその変則的急性時空震が発生したのでは？

「そうではない。変則的急性時空震は名前の通り、変則的かつ急に現れる。涼宮ハルヒの関係は皆無。しかし、天蓋領域の影響が多少見られる。周防九曜ではなく。別の個体。」

そうなのですか。どうしまじょうか。彼にこのことを言わなくてはなりません。

「・・・まだいい。後から伝える。今から私は事態の解決のため、周防九曜に接触。協力要請をしてくる

大丈夫なんですか？

「大丈夫。周防九曜は友人。休日にはよくショッピングにも行つている。周防九曜は天蓋領域の極々少数の涼宮派に属している。だから大丈夫。私たちの味方。」

そうなのですか。これはこれは、驚きです。

それよりも。長門さん、天蓋領域に涼宮派が存在するのなら、周防九曜以外に涼宮派のTFEI端末も存在するのでしょうか？

「存在する」

そうですか、これは機関に接触するように言わなくてはなりません。長門さん、できればどこにいるのかも教えていただけますか？

「細かい場所までは無理。それでもいい？」

「いいですよ。あとは、我々の力で探します。」

「そう」

そう言つて長門さんは天蓋領域の涼宮派の作り出したT.F.E.I.端末の大雑把な居場所を教えてくれました。数は4体と少なめです。「数は少ないが能力は強大。怒らせないよう気をつけて」わかりました。気をつけるよう言っておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0915d/>

涼宮ハルヒの子育て

2010年10月13日18時04分発行